
旅途第一回

黎かな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旅途第一回

【Zコード】

Z6022C

【作者名】

黎かな

【あらすじ】

世界をつくつた磐琥という神が下界を見届ける。自分がつくつた生き物 人でも妖怪でもないモノの生き様を見届ける。

磐琥といつもののがいた。この世をつくつたらしい。そして天界と下界をつくつた。天界は彼が治めることにして下界は誰を治めるか…。悩み悩んだが決まらず下界の秩序が乱れてきたところ、閃いた。この秩序無き世界を秩序あるところに導こうとするものは、私が決めるのではない。私が決めるまでに導くのだ。私は天地を作るほどの力を持つものだが、直接手を加えては、下界を治めるものが死した時また私が決めなければならなくなる。そうするときりが無い。その必要をなくすために不老不死にするか?。しかしそれでは天界へくる権利ができてしまう。人間とは天界に来れる権利をもちながら、下界に居続けるような生き物じやない。まあ来たときに下界の秩序を乱したとし、裁けばいいが、これまたきりが無い。やはり下界は下界で自然に決めたほうがいい。いや、そういう裁くのが面倒くさいとかそういう問題じやないくて…。

時は流れ、1年後。下界も磐琥が人間にあえて植え付けた競争本能のおかげで世は急速な発展。世界は三つの皇、三皇を定め三皇が治めることになった。それぞれの皇の下に5人の部下の五帝が配置され、世界は4つの大陸に分かれた。東州、西州、南州、北州である。

傲慢の国、有名な花畠の祠に一つの石があつた。その石に魂が含まれていた。磐琥が世界を作ったときにはちょっと遊び心で作ったものである。人間をベースとした生き物。彼にはこれから色々なことを自分自身で吸収していくもらう。人間は親から子へ知識をもうが彼は違う。知識を得るのはここにくる者達が祠に祈りをするときに使う言語というものを吸収してもらう。非常に楽しみだ。だから人が来るのを多くするために、花畠を非常に美麗にしたのだ。「そろそろいいだろう。お前の生きたいように生きるがいい。その生き様。見届けさせてもらうよ。」と磐琥が言ったと同時に、下界

の満月から光が…。花畠の祠からもまた光。空中で出会つたその二つの光は踊るかのじとく回転し、一つの眩き光になつた。あたりは昼にでもなつたかのように光が広がつた。そして、やさしい光を放つ卵が花畠に落ちてゆく…。と、そのとき、花畠の地面がうごめいた。そして地面から岩の塔が出てきた。そびえ立つバカデカイ塔。その塔に卵が降り立つた。

「そうだな。まずは体の水分だな、5割以上だつけな。2日間くらいでいいか。」と磐琥が言つた瞬間この世を水浸しにしてしまうのではないかというくらいの大雨。

「次は酸素。これがなきや動けええもんな。半日でいいか。」そして暴風が吹き荒れた。この一日半、だれも花畠には近寄らなかつた。暴風が過ぎ去つた夜。今夜は満月。光の卵にヒビ。「やつと生まれたぜ。結構美男子じやねえか。」磐琥は微笑んだ。「始まった。スペシャルショード。」

その男の子の髪の毛は伸び放題。キレイな茶色。自分の周りを見渡す。上を見上げる。満月だ。太陽の如く黄金色の満月がそこには浮かんでいた。

「楽しそうじゃねえか。」

あなたのほうがたのしそうですよ磐琥、と楽しそうに笑う側近。下界の”漫才”とかいうモノをみながら爆笑して私の横で「くだらねえ。」なんていつてるあなたがそんなに楽しそうにしてるなんてね。

数日前、例の卵が割れた。その中からかわいい顔立ちの少年が出てきた。でてきて早々いきなり寝た。夜だからだったのだろう。人間の本能がなんかだらう。翌朝、一人の若者が祠の近くで彼を発見して色々話かけたあげく家に持ち帰った。ここ数日毎朝見かける若者だった。

数日前あの月みたいなパツキンのヤツがオレをここに連れてきて服を着せてくれた。すっげえおいしいモンまでくれた。本当にすげえおいしかった。イタズラすんなよ、とかいつていつもふくれ顔だが、おいしいモンをくれたからきっとイイヤツってやつだろう。今日は谷にあるカワに連れて行つてやるつて昨日いつてた。カワつて何かしれねえけど、花畠より楽しいところだといってた。時々オレにくわせている魚つてやつもいるつていつてたな。とりあえず楽しみだ。

カワにはいっぱいの水がながれてた。冷たくておいしかった。空も今日は澄んでいた。

「気をつけるよ。小僧。滝のほうには妖怪がいるからな。大人なら何とか逃げられるけどお前じや無理だからな。すぐ食われちまう。」といつもの顔でヤツは言った。

水遊びしながらオレは「うん。」とだけ言った。

「本当にわかつてんのかよ。」とヤツが言った直後、オレは変な胸騒ぎを覚えた…。

予想どおりだつた。人間とほぼ同じ容姿だが、人間ではなかつた。

それは明らかに人間外の何者でもなかつた。たぶん…妖怪…！

「オイ！」ヤツが叫んでいた。ビビリながら…。オレはいきなりのその妖怪の登場に腰を抜かしてしまつた。噂をするとどうのこうのとヤツが言つてた。そのとおりだつた。近づいてくる妖怪。「逃げろ！」というヤツの声が谷になり響く…。妖怪は目の前に立つている…。笑みを浮かべながら妖怪は腕をあげた。…オレはシぬのか？

何が起こつたかわからなかつた。一瞬にして妖怪が「立つていた」場所は血の海と化した。子供の姿が消えている。どこにいった？何がどうなつてている？

オレは驚愕した。眠る時以外は色々なことを記憶してきた。が、今一瞬何が起こつたのかわからなかつた。そう、記憶が途切れている。下流方面のほうからヤツが近づいて来た。

「オイ！大丈夫かガキ！すげえ汗つたんだぞ！」

「ワリイ、ワリイ。」とアタマを搔くオレ。襲われそうになつたさつきの場所は紅で塗り散り散りばめられていた。あたりはすぐ臭かつた。

「とりあえず、一度帰るぞ。何が起こつたかわからん。共食いのために妖術をほかの妖怪が使つたのかもしれない。急ぐぞ…！」

帰り道、変なチラシつてヤツを拾つた。ヤツに見せたら「滝つぼの妖魔は賞金首だ。首は持ちかえってきてねえし、あれはもう粉々だつたから、何ももらえないさ。」といつた。

その夜、ヤツに爪を切つてもらつた。そしたらきなり「何かほしいモンあるか。」といいだした。オレはすかさず「おいしいモン」と言つた。「それはいつでも作つてあるからほかのにしてみる。」そういわれても困る。おいしいモンしか頭になかつた。毎日寝て食つて花畠で遊んで何もほしいモンはなかつた。困つた…。「ネエのかよ。」と言つてきたのでなぜかわかんないけどムカついたから「

アル！」って声を裏返してしまった。あきれた顔でヤツは「明日の夕方までに考えておけよ。」とヤツは言い、オレは「うん」といった。

朝がやつてきた。キレイなおいをした花畠のにおいが窓から入つてくる。オレは布団を飛び出し花畠の待つドアの向こうへと飛び出していった。今日はばいぶん早く起きたらしい。いつもは見ない人が祠の前にいた。女の子だつた。

「こんにちわ。」とオレが挨拶したら笑つて「こんにちわ。」と返してくれた。

「ここいらへんで見かけない子ね。どこに住んでいるの？」

「あそこ。」とヤツの家を指した。

「あたし杏つていうの。あなたの名前はなあに？」
オレの名前？オレつて誰だろう…。ヤツに教えてもらわなきゃ。そのときのオレはヤツは何でも知っている、祠にすんでいるという神みたいなやつだとおもつっていた。月色のキレイな髪をしていたからかな…。

「明日、教えてあげる。」ときびすを返しながら「バイバイ」といつた。かすかだけど「バイバイ」って聞こえた気がした。

「なあ、オレの名前つてなんだよ！」ヤツは料理をしていた。「んなの知るわけねえだろ。お前、一回もオレに言つてねえんだから。」野菜を切りながら言つ。

「違くて、オレ…名前ねえんだよ。」

沈黙。そしてヤツは口をゆつくりと開いた。
「しゃあねえな、お前は今日から」また沈黙。
「美琥だ。わかつたな。」

「おう！」すげえ不思議な気持ちになつた。

大変なことに気づいた。あのガキ…美琥があの妖怪を殺つた。そ

れに気づいたのは昨日の夜、ヤツの爪を切っていた時だった。深紅に染まつた爪の内側。花畠で血に触れる機会なんてなく、血を流す時もない。家の中でも一部屋しかない中で血を流したような時はなかつた。オレは美琥がやつたと確信した。

気づいた時、別に恐怖なんてそんなものはなかつた。驚きとともにただ、人が聞いたら変に思うだろうがただ尊敬してしまつた。あんなガキが、どこに一瞬あの妖怪を粉々にする力をもつているのか……驚きと尊敬がその時オレを襲つた。だからだろうかアイツに褒美をやりたいと思つた。本当は賞金首だったから金がもらえたんだ、と一人で納得する。

「今日の夕飯はなににするか…」

ヤツの名前は慧手えじゅだった。名前をつけてもらつた後に教えてもらった。「お前はオレに名前を名乗つた。オレもお前に名を名乗る。」って変なことを言つた。

早起きしたけど花畠に女の子はいなかつた。いつものように蝶が乱れ飛んでいた。なぜかわからないけど、すぐくあの女の子に名前を教えたかつた。なんとしても。

「これが町があ。人がいっぱいいるなあ。」こんな言葉でいつも驚いた。人がいっぱい。自分よりも大きくて前が見えない。女の子も搜せない。ここを抜け出さなくちゃ。

人ごみの中を抜け出す美琥。小さいからだのおかげで人ごみを抜け出し、住宅街にでた。

慧手の家と違つて白い石みたいなものでできた家がいっぱい並んでいる。道は岩で敷き詰められていたが別に足場は悪くなかった。住宅街を風の子の文字通り風のように走りぬけてゆく美琥。一つの角を曲がつた。そして美琥は足をとめた。

いた。昨日の女の子だ。大きい結構年をとつている男の人と一緒にいた。「こんにちは。」とオレは言つた。女の子は何も答えな

い。一瞬目を合わせ、オレの横を歩いていった。何事も無かつたかのようだった。

「え。」振り向いたオレが見た女の子の姿。楽しそうに、横にいた男と歩いていった。オレは叫んだ。「杏！オレ！美琥つてんだ！杏！」杏に聞こえるようにオレは必死に叫んでいた。その努力も空しく女の子の背中は夕日の色に染められながら小さくなつていった。

一方天界では磐琥と側近神がにらみあいながら黒の石を並べていた。白い石を取つてゆく磐琥。

「ゲ…。」

「待つたはなしだぞ。」と楽しそうな磐琥。

俯き、歩く少年がいた。

杏はオレに気づいていた。少なくとも聞こえてたであらう。赤く照らされた道は美琥の悲しみを更に増させた。

こんな時間に帰つたら慧手は怒るだろうな。

慧手の家に着くころには真っ暗で月の光でやつとのこと周りが見えるくらいである。なれた手付きでドアを開き慧手がいるであろう台所に目をやつたところ、美琥の目は揺れる。慧手が倒れている。何が、あつたんだ。床を強く蹴り慧手の傍に寄る。

「おいいー！どうしたんだよー！」こんなところで寝るなよー」震えた声が家中に響き渡る。慧手はビクともしない。「返事しりよー・慧手ー！」一筋の光が田からこぼれ出た。

とりあえず…ベッドのほうに…。

慧手はガリガリで容易に運べた。とりあえず今は誰か呼びにいかなきや…ドアに飛びつき月照らす漆黒の道へ少年は走り出した。

美琥は走っていた。慧手に何があつたかわからない。でも台所で寝るなんて尋常じやない。きっと気絶してしまったんだ！

色々なことが頭をよぎる。少ししかない知識の中で一番ありえると思ったのは…病気であった。絵本で見た。ネコつて男の子のおじいちゃんが倒れて死んでしまった。病気になつていたらしい。では慧手は死んでしまうのか…そんなことはさせない、絶対に。だから今やることは、イシャを呼ぶこと。

漆黒の闇は笑っていた。いや、笑つてゐるよつて見えた。この危機的状況下ではあらゆるもののが敵に見える。走る。走る。走る。飛ぶ。いつしか美琥は飛んでいた。一つ蹴るごとに走りの速さを軽く二倍以上を超える飛躍。速さに目はついていけない。夜の冷たい風は目を引っかいていき開けることを許されない。

何がが…。

重く鈍い衝撃は肩を貫き我が体においかぶさつていた。

「うう…」この尋常でもない速さで近づいてきた小さいものは人のように見えた。しかし人ではありえない速さ…。

「妖怪の子供…ですか…」下に視界を移動させつつ露淵ゆふちは子供を抱き起き上がった。

「何なんだよ！」気づけば男を突き飛ばしていた。平然とした顔で男は呟いた。

「あなた…何者ですか。人ではない氣けですしましてや妖魔の類でもない」

「何は」うちのセリフだ！何のはなしだよ！イシャよばなきや慧手は死んぢまつんだ！」

「慧手…。如公が…。やはり…。そうか…。やはりあいつの子供だからか…。」

「どけよ…何ぶつぶつ言つてんだよ！」男は退く氣配は完璧にない。真直ぐにオレの目に突き刺さる視線に思わず寒気を感じる。

神々しいまでの瞳をもつ男は口つきを変え言つた。

「ああ…。やはり…。もつだめですよ。彼の氣は完璧に消えてます。死にました」

彼の言葉には一点の迷いも無く、ただただ真実だけを述べているようにしか聞こえなかつた。頭の中で何回も回るその最後の一言を理解したとき、彼の、慧手の最期にオレは立ち会えなかつたのであつた。

涙はこぼれていた。美琥の泣き声は漆黒の空、潔白の月に向かつて高く響いていた。

「磐琥様。今日の魂の返還数です。お確認お願いします」

女神に渡された紙を一瞥し、ハンコを押す。大きく紅で押された

印。再生の印であった。

慧手は死んでしまった。寿命といつもので死んだ。露淵といつ青年曰く慧手はこの傲慢の国の帝であったといつ。帝は城に住むと絵本で描かれていたので露淵に疑問を投げかけたところ彼は何も言わずそっぽを向いた。

窓から黄金が射してきた。

朝が来る。絶望の朝だ。

光は笑っていた。嘲笑だ。

オレはこれからどうすればいいのだ。料理もできなければ、洗濯もできない。

果然といつもそこに座っていたはずの男の椅子を眺めた。出会いは黄金の輝きだったのに。

満月浮かぶ暖かい夜。命が始まつた。満月を眺め続ける少年。飽きる様子もなく、いつしか満月のまわりに紺が漫食し始めた。

朝だ。

数刻後。金髪の男は祠の前にいる少年を見ていた。

「邪魔なんだけど」

少年は振り向いた。男、慧手は困り果てた。目が訴えかけている。

「生きたい」と。

「お前や。そこどいてくんね?」

少年に動く気配はまったくない。

「来い」

自分でも何を言つているのかわからなかつた。ただ…自分の最期にせめて、せめて誰かと幸せに過ごす時間が欲しい本能から出た言葉だつたのかもしれない。孤独には慣れていたけどね。

生きることだけしか考えてない黄金色の瞳と神なる黄金の髪を持つ男の出会いであった。

「おっさん。オレ、これからどうすればいいかな」

「知りませんよ。そんなの。あなた、慧手の子供ではないのですね？」

「うん」

「では用はありませんね。邪魔しました」

男は去つた。

「ではお主はその子供を帝にしろといつのだな」

「はい」

「お主は最高神官だがその子供にしろといつ理由はどうある。先視術か？」

「違います」

男は口元で微笑んだ。「では選挙になる。皆のもの異論はないな広場にいる一同は一人を除いて一致する返事をした。話すこの男、最高審判は選挙でからず帝になる。こんな男を帝にしてたまるものか。

「お言葉ですが審判。法では故帝の遺書に書かれていることは絶対ですよね？」

「なんだまだ何かあるのかね」「彼方の負けですよ」

男の顔に余裕はなくなつた。恐怖。

「遺書を読み上げます。」オレの命はもうないと思つから次のことをお請する。一に我が養子、美琥を次帝にすること。一に彼の命令は絶対の法律無視であること。一に露漏を側近につけること。んじや楽しくやってくれや。」だそうです

周りがざわめく。今日の会議もお開きと感じたのか一人の男が広場をでていつてしまつた。

「うう…。偽造だ！そんなものの偽造だ！おのれ謀反人め！引っ立てよ…」

「静かにしてください。筆跡はあなた直属の鑑定屋にしらべさせたところ一致。そのほか指紋。気も見つかりました。これは完璧に慧手故帝のものです」

「くつ……体に力が入らぬ……最高審判の体は心性とともに崩れていった。」

「美琥さん。こんにちわ」

露淵だ。

「何か用かよ」

慧手の死から1週間。美琥は立ち直れていなかつた。が、かるうじて冷蔵庫にあつた冷凍炒飯で生きてこれた。

「ハイ。貴方はこの度第5代目傲慢の国第1帝になりました」何を言つているのかまったくわからん。「は？」

「だけえ」

城だ。

「行きますよ」露淵がぼそつといふ。

「なあ！絵本とかいっぱいあるのかな！」

「絵本ですか。わかりませんが普通の本ならいっぱいありますよ」

「うえー」

路淵とのたわいもない話。オレの心はすっかり晴れた。露淵の「慧手がみてますよ」という一言で。

「今日からここが貴方の部屋です。帝としての仕事は私が教えながらやりましゅう」

「絵本どじよ」

「図書室に行つてみましょ。待つて下さい」

露淵は床に指で円を書くようなそぶりをした。床に白く輝く円が現れ始める。

「中に入つてください」

「う、うん」

「移^{ウシ}」

場所は一点本棚しかない部屋に移る。

「今何！？」

「移動術です」

「すげえ！どこでもいけんの！？」

見たこともないものを見た少年の目に輝きが増す。

「今度おしえてあげますよ」

露淵は微笑んだ。本棚のはるか上有る窓からじまれる光はこの握りの幸せを贊美していた。

「…といつことで美琥は形式上^{いち}薦家となるわけです」

「露淵は何家の」

「濾得家ですよ。口ではあつませんからね」

「下ネタかよ…」

それから帝王学の授業以外の日は図書室に行つた。図書室にいくための移動魔法をおしえてもらつたのでいつでもいた。そしてある本を見つけた。

濾得鮒^{ふない}賂^{ふな}著 不老不死の秘訣 死者甦生^{せいじやくせいじやう}章

ひきつけられる様に美琥は本をめくつた。最初の章にはこう記されていた。

皆さんは鍊金術を知っていますね？ある種のものを種内の一定のものに変化させることで

す。これは犬や猫などで試すと異常なく甦生ができてしまします。では、人間はどうか？現在

の法律によつて、この星でその術を人間にすると犯罪になりますが
古代の本ではまったく成功

しなかつたそうです。そのわけを魔術の視点で見ていきましょう。

皆さんこれを読んでもどうかないでください。不老不死の人は現
在います。

驚くだろ。オイ。美琥は部屋を飛び出していった。

「オイ側近」

「早く名前を覚えてくださいよ。もう二〇〇七年経っているんですよ? 下界時間ですけど」

「そんなことはどうでもいい。あいつはどうなつた。あのふざけた
名前のえつと…」

「ファンタジーですか? まだ生きています。幽閉されながらも」

「そ。異常なしだね。ああスッパム チョ食べてえ」 磐琥は大きく
あぐびをした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6022c/>

旅途第一回

2011年1月27日04時50分発行